『悲しみの中で』

令和 7 年 4 月 16 日
奨励：松並徹治

ルツ記 1：１～6
1：1 節さばきつかさが治めていたころ、この地に飢饉が起こった。そのため、ユダのベツレヘム出身のある人が妻と二人の息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。
1：2 その人の名はエリメレク、妻の名はナオミ、二人の息子の名はマフロンとキルヨンで、ユダのベツレヘム出身のエフラテ人であった。彼らはモアブの野へ行き、そこにとどまった。
1：3 するとナオミの夫エリメレクは死に、彼女と二人の息子が後に残された。
1：4 二人の息子はモアブの女を妻に迎えた。一人の名はオルパで、もう一人の名はルツであった。彼らは約十年の間そこに住んだ。
1：5 するとマフロンとキルヨンの二人もまた死に、ナオミは二人の息子と夫に先立たれて、後に残された。
1：6 ナオミは嫁たちと連れ立って、モアブの野から帰ることにした。主がご自分の民を顧みて、彼らにパンを下さった、とモアブの地で聞いたからである。

人生には、避けられない悲しみや試練があります。ルツ記の冒頭では、エリメレクの家族が飢饉のためにベツレヘムを離れ、モアブの地へ移住します。しかし、そこでエリメレクとその息子たちが亡くなり、ナオミは深い悲しみに包まれます。この物語から、私たちが悲しみの中でどのように神に信頼し、歩むべきかを学びましょう。

１節にある「さばきつかさが治めていたころ」とは、士師記の時代を指します。この時代は、ヨシュアが亡くなった後、サムエルがサウルを王とするまでの期間です。イスラエルの民は、しばしば偶像礼拝に陥り、神が敵を用いて民を裁かれ、悔い改めることを促すため士師を立てられ、敵から救い出されました。そして、しばらく平和が続くと再び罪を犯すという繰り返しでした。士師記 2 章 11 節から 16 節を見ますと次のように書かれています。

2：11 それで、イスラエル人は主の目の前に悪を行い、バアルに仕えた。
2：12 彼らは、エジプトの地から自分たちを連れ出した父祖の神、主を捨てて、ほかの神々、彼らの回りにいる国々の民の神々に従い、それらを拝み、主を怒らせた。
2：13 彼らが主を捨てて、バアルとアシュタロテに仕えたので、
2：14 主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らを略奪者の手に渡して、彼らを略奪させた。主は回りの敵の手に彼らを売り渡した。それで、彼らはもはや、敵の前に立ち向かうことができなかった。

2：15 彼らがどこへ出て行っても、主の手が彼らにわざわいをもたらした。主が告げ、主が彼らに誓われたとおりであった。それで、彼らは非常に苦しんだ。
2：16 そのとき、主はさばきつかさを起こして、彼らを略奪する者の手から救われた。

また、「この地に飢饉が起こった」とありますが、士師記の時代の飢饉は、人々が神の律法から離れたときに起こる霊的・道徳的危機の象徴ともいえます。現在の私たちも、神の導きから離れると「霊的な飢饉」に陥ることがあるのではないでしょうか。飢饉について申命記 28：23～24 を見ますと次のように書かれています。

28：23 あなたの頭上の天は青銅となり、あなたの下の地は鉄となる。
28：24 主はあなたの地に降る雨をほこりに変え、天から砂ぼこりが降って来て、ついにはあなたは根絶やしにされる。

23 節の「あなたの頭上の天は青銅となり」これは、雨が降らず、天が閉ざされることを意味します。また青銅は硬くて水を通さないため、乾燥した天候を表しています。続く、「あなたの下の地は鉄となる」とは、 乾ききった地面は硬くなり、農作物が育たないのです。そして「鉄」は非常に硬く、水分を保たないため、干ばつや飢饉の状態を示しています。

24 節の「主は、あなたの地に降る雨をほこりに変え」とは、 普通なら恵みの象徴である雨が、ほこり（砂や灰のようなもの）に変わるという恐ろしい警告です。これは、中東地域でよく発生する砂嵐や、火事や戦争による灰の降り積もる光景を指していると思われます。続く「ついにはあなたは根絶やしにされる」とは、一時的な罰ではなく、イスラエルが悔い改めるまで続く神の裁きを示しています。神が与える雨は、聖書では祝福や命の源として描かれますが（申命記 11：13～14）、逆に雨が降らないことは神の裁きを意味します。ここでは、ただ雨が降らないだけでなく、砂ぼこりが降ることで、さらに厳しい状況に追い込まれることを示しているのです。

2 節、飢饉のために、エリメレクとその妻ナオミ、二人の息子マフロンとキルヨンは、ベツレヘム、（パンの家という意味）からモアブの地へ移住します。
モアブについて聖書を見ますと、ソドムとゴモラが滅ぼされた後、ロト（アブラハムの甥）は娘たちとともに山の上の洞穴に住みました。彼の娘たちは、父から子をもうけることで子孫を残そうとし、長女が産んだ子がモアブ人、次女が産んだ子がアンモン人となりました。（創世記 19：30～38）またモアブは、イスラエルとはしばしば敵対関係にありました。イスラエルが約束の地に向かう途中、モアブの王バラクは占い師バラムを雇いイスラエルを呪わせようとしました。（民数記 22：5～6）また、モ

アブの女たちはイスラエル人を誘惑し、バアル・ペオルの偶像礼拝に引き込みました。（民数記２：1～３）また、士師記の時代にはモアブの王エグロンは、アンモン人、アマレク人と同盟し、イスラエルを 18 年間支配しました。（士師記３：12～14）

エリメレクとその家族は飢饉という試練の中で、神に頼るのではなく、自分たちの考えでモアブへ行ったのです。私たちも困難な状況にあるときに、神を求めるのではなく、自分の力で解決しようとする時があるのではないでしょうか。しかし、神から離れることは、大きな苦しみをもたらすことになるのです。

３節～５節，まずエリメレクが死に、ナオミは未亡人となります。
息子たちはモアブの女性（オルパとルツ）と結婚しますが、異邦人との結婚は律法によって禁じられていました。申命記 7：3～4 には次のように書かれています。
7：3 また、彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。
7：4 というのは、彼らはあなたの息子を私から引き離し、ほかの神々に仕えさせ、こうして主の怒りがあなたがたに向かって燃え上がって、あなたをただちに根絶やしにするからである。

モアブ人と結婚することは、その文化や風習を受け入れることになるので、神はこのような結婚を禁じられていたのです。また、モアブでの生活が 10 年にも及ぶことから現地に馴染んでいたために、モアブ人に対する抵抗感が薄れていたのでしょう。このことから、私たちは、自分が置かれている地の影響を受けやすいということを覚えたいと思います。

その後、二人の息子も死に、ナオミは夫も息子も失い、二人の嫁と共に取り残されます。ナオミは、夫と息子を失うことで、大きな悲しみに包まれます。彼女は異国で孤立し、当時の社会では非常に厳しい立場に置かれました。

６節、ナオミは神が再びベツレヘムを祝福されたことを聞き、神のもとへ帰る決心をしました。私たちも、悲しみの中で神に立ち帰ることが大切です。
ナオミは悲しみの中で神の御心を求めました。私たちも、悲しみの中で神を見失うのではなく、神の御手を認め、導きを求めましょう。ナオミは失ったものばかりに目を向けていましたが、神はすでにルツという祝福を用意しておられました。私たちも、悲しみの中でも神がどのように働いておられるかを信じることが大切です。

悲しみのため、行く先も分からず涙で先が見えない時があるかもしれません。しかし、一つの道が閉ざされたとき、神は、また別の道を備えられているのです。ですから、先

の見えないような状況にあったとしても、私たちの罪を赦すために十字架で命を捧げてくださった、主に立ち返りましょう。ナオミは試練の時を過ごしましたが、神の時が満ちたとき、彼女は行動を起こしました。私たちも、神の導きを信じて前に進むことが大切ではないでしょうか。悲しみで胸が張り裂けそうなときでも、主に信頼し続けましょう。詩編 126 編には次のように書かれています。

126：5 涙とともに種を蒔く者は喜び叫びながら刈り取る。
126：6 種入れを抱え泣きながら出て行く者は束を抱え喜び叫びながら帰って来る。